

ロスト阪神

あの日
の光景

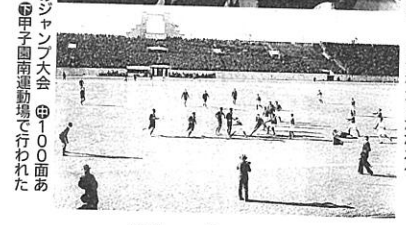
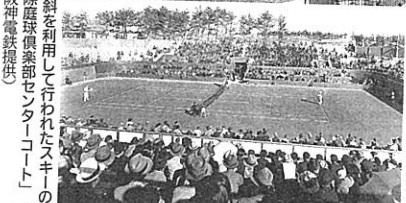
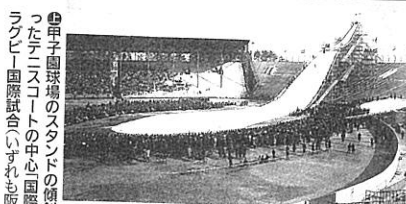
連載4回目、レジャーの聖地として紹介した西宮市南部の鳴尾地区。実はもう一つの顔があった。阪神電鉄が築いた「スポーツ王国」だ。鳴尾の歴史に魅了され、住みながら地域研究を進める武庫川女子大教授の丸山健夫さん(60)に案内をお願いし、在りし日の面影を追った。

スポーツ王国

「国の出発点です」。話は100年以上前にさかのぼる。明治40(1907)年、近くに競馬場が造られた。しかしすぐに馬券が販売禁止に。阪神電鉄は場内を借りて野球場をつくり、中等(高校)野球の全国大会を誘致した。

大正12(1923)年には馬券が復活。だが阪神電鉄はすでに、次の手を打っていた。廃川となった枝川と甲川の河川敷を買い、分岐点に人工球場を建てた。

「阪神力率先して、立派な都会を造る」外、早や道ガナイ。阪神電鉄の百年史にある故、二階堂専務の言葉だ。ここを皮切りに、壮大な開発を進めようとした気概がうかがえる。



●甲子園球場のスタンドの傾斜を利用して行われたスキージャンプ大会(甲子園面)。●甲子園南運動場で行われたラグビー国際試合(いずれも阪神電鉄提供)



戦火に消えた夢の「聖地」



甲子園球場名物。舞い上がるジェット風船

「少し歩きましょう」。そう話した丸山さんの足がすぐに止まる。球場西側。「甲子園大プール」の跡地だ。夜間照明や飛び込み台も備えていたとか。続いて甲子園筋を南へ。枝川を埋め立ててきた通りには、タイカーステッスの店が並ぶ。

突然、丸山さんが住宅街に向かって両手を広げた。「こっちは100面のテニスコート。あつちがラグビーの国際試合も開かれた南運動場信しられますか」

当時を想像してみる。あたり一帯に声援が響いていたのだらう。しかしそれは度重なる空襲と、米軍による

「少し歩きましょう」。案内の最後は甲子園プール跡。駐車場に残る松のそばで丸山さんがつぶやいた。「あの戦争さえなければ、鳴尾が全スポーツの聖地になっていたかもしれませぬ」

別れを告げ、再び甲子園球場に向かう。何千発もの焼弾から復活した、王国の生き残り。スタンドに立ちふと父と来た小学生時代を思い出した。確かKKコンビが去った直後の夏だった。

汗ばんだ肌に涼風が心地いい。次の夏は娘たちを連れてこようか。

〔関西篇〕
〓おわり〓

甲子園球場 1924年、甲子園大運動場として建設された。タイカースや高校野球の歴史を学べる「甲子園歴史館」は高校生以上600円、4歳～中学生300円。月曜休館。同館☎0798・49・4509